

あつたことか、なかったことか

昔むかし、ある国にりつばな王さまがいました。王さまには、王子が三人ありました。王さまはたいそうお金持ちでしたが、とりわけ広い美しい庭を持っていました。庭には、りんごの木が一本あって、帽子ほどの大きさのりんごがなりました。王さまは、このりんごの木を、まるで自分の目のように大切にしてい、けつしてりんごを摘むことはありませんでした。

ところが、そのうち、りんごが盗まれるようになりました。数を数えておいたりんごが、朝になると少なくなっているのです。そんなことが何日も続きました。王さまは、三人の王子を呼んでいいました。

「りんごの木を守ることができないくらいなら、どうしてこの王国を守ることができよう。おまえたち、待ちぶせをして、りんごを取って行くやつをつかまえなさい。どろぼうをつかまえた者には、わしの国をぜんぶあたえよう」

最初の晩は、いちばん上の王子が見張りに立ちました。ところが、王子は、りんごの木の下に横になってぐっすり眠ってしまいました。夜中に、魔神のデフがやって来て、りんごをもぎ取って行ってしまいました。朝になると、上の王子は、王さまに、

「一晩じゆう目を開けていましたが、だれも来ませんでした」といいました。

つぎの晩は、二番目の王子が見張りに立ちました。ところが、この王子も眠りこんでしまい、デフが、りんごをもぎ取って行ってしまいました。

三日目、末っ子の番になりました。上の王子たちは、末っ子をばかにして笑いましたが、末っ子は、弓矢を持って見張りに立ちました。そして、ひと晩じゆう目を開けて見張っていました。真夜中になると、デフがやって来てりんごの木によじ登り、実をもぎ始めました。末っ子は、矢をつがえて放ちました。矢は、ひようと飛んでいき、デフの心臓に命中しました。デフは、木から転がり落ち、わめきながら逃げて行きました。

あくる朝、末っ子は、王さまに、

「敵に矢を命中させました。でも逃げたので、探しに行かねばなりません」といいました。上の王子たちは、笑いました。けれども、末っ子が、

「じゃあ、ぼくといっしょに来てよ」というと、王子たちは、弓矢を持ってついてきました。

三人は、りんごの木のところから、血が点々と続いているのをたどって歩いて行きました。すると、血のあとは、大きな岩のところまで終わっていました。その岩をどかすと、岩の下に、地中に下りていく穴あながありました。三人は、穴を下りていくことにしました。

最初に、上の王子が、体に縄なわを巻きつけて下りて行きました。じきに、デフが、転げまわつてうなっている声が聞こえました。上の王子は、大声で、

「引き上げてくれ！引き上げてくれ！」とさげびました。ふたりは、縄を引き上げました。

つぎに、二番目の王子が、下りて行きました。デフの声が聞こえると、この王子もさげびました。

「引き上げてくれ！引き上げてくれ！」

末っ子の番になりました。末っ子が下りていくと、デフは、今まで以上に大声でうなり始めました。末っ子は、

「もつと降おろしてくれ！もつと降ろしてくれ！」とさげびました。末っ子はどんどん下りて行って、穴の底に着きました。そこに、デフの家がありました。

家の中で、年とった女のデフが、火に当たりながらおかゆを煮にていました。末っ子が、

「おばあさん、何を煮ているの」とたずねると、ばあさんは、

「うちの息子むすこがけがをしてね。その子のためにおかゆを煮てるんだよ」といいました。末っ

子は、

「息子さんは、どうしてけがをしたの」とたずねました。

「だれかに、弓で射られたんだよ」

「じゃあ、いいことを教えてあげよう。なべいっぱいバターを煮て、それを傷きずに塗ぬりつけるんだ。すぐによくなるよ」

ばあさんは、なべでバターを煮て、デフの傷口に塗りつけました。デフは、ぐったりのびてしまいました。末っ子は、ばあさんも矢でやっつけて、奥おくに入いって行きました。

すると、ある部屋の中に、娘むすめが三人とらわれていました。それは、お日さまの下でまだだれも見ることがないほど美しい娘たちでした。末っ子は、娘たちを救い出して、穴の下までもどりました。そして、上の王子たちに向かつて、

「縄をおろしておくれ」とさげびました。上の王子たちは、縄をおろして、一番上の娘を引

き上げました。つぎに、二番目の娘を引き上げました。

末の娘を引き上げようとすると、娘は末っ子にいました。

「わたしが先に上がったら、あの人たちは、あなたを裏切うらぎって、穴の中に置き去りにするでしょう。だから、あなたが先に引き上げてもらいなさい。そのあとで、わたしを引き上げてくださいな」

末っ子は、

「兄さんたちはそんなことしないよ。あなたを先に助けたいんです」といいました。すると、娘は、いいました。

「分かりました。でも、あの人たちは必ずあなたを裏切ります。だから、これだけは聞いてください。もし取り残されたら、この道をずっと行ってごらんください。すると、ひとつの部屋に着きます。部屋の中には、羊が二頭います。一頭は白い羊で、もう一頭は黒い羊です。黒い羊に乗ると、あなたは、その部屋から出られなくなります。白い羊に乗ると、地下の王国に行くことができます。かならず白い羊に乗るんですよ。羊が地下の王国に向けてかけ出したら、こう唱なえなさい。

おばあさんの屋根はやわらかい

おばあさんの屋根は木綿もめんできている

そうすると、あなたは、やわらかいところに落ちるでしょう」

上の王子たちは、末の娘を引き上げると、縄を切って落とすし、娘たちを連れてどんどん行ってしまいました。末っ子は、穴の底に取り残されて、すっかりしょげてしまいました。しかし、娘に教わった道を歩いて行きました。すると、二頭の羊のいる部屋に着きました。末っ子は、白い羊に乗りました。羊はかけ出しました。末っ子は唱なえました。

「おばあさんの屋根はやわらかい

おばあさんの屋根は木綿できている」

すると、末っ子は、おばあさんのやわらかい屋根の上に落ちました。

末っ子は立ち上がって、おばあさんの家に入って行きました。

台所で、おばあさんがおかゆを食べていました。おばあさんは、片方の目が見えませんでした。末っ子は、おばあさんの見えないほうの目のそばに腰をおろして、おばあさんのお皿から、おかゆを食べ始めました。おかゆがすぐになくなってしまったので、おばあさんはお

どろいて、ふり向きました。すると、そこに若者がすわっていました。おばあさんは、

「おまえはだれだね」とたずねました。

「あなたの息子だよ」

おばあさんは、子どもがなかったので、大喜びしました。そして、末っ子を自分の息子のよう  
うに、何かとめんどうを見てやりました。

あるとき、おばあさんは、小麦粉をふるいにかけてながら、泣き始めました。

「どうしてないているの」と、末っ子がたずねると、おばあさんはいいました。

「魔神デフのやつが、水をおさえてしまったんだよ。この粉をどうやって練ねったらいいか分から  
ない」

「ぼくが、水をくんできてあげよう。おけを貸してちょうだい」と、末っ子がいうと、おば  
あさんは、

「そんなことしたら、おまえは、デフに殺されてしまうよ」といいました。

末っ子は、おばあさんのいうことに耳を貸さないうで、川へ行つて、おけに水をいっぱい  
みました。そのとき、デフがさげびました。

「そこにいるのは、だれだ！ここでは、ハエさえも黙だまっては通れないのだ。いったいおまえ  
は何をしにやってきた」

末っ子は答えました。

「ぼくはあなたのお客だよ」

デフは、

「よし。今日のところは、お客としてゆるしてやろう。水を持っていけ」といいました。

末っ子は、水を持って帰つて、町じゅうの人に水を少しずつ分けてあげました。そして、  
みんなが水を使い切ると、また、くみに行きました。すると、また、デフがさげびました。

「そこにいるのは、だれだ！」

「ぼくだよ。あなたのお客だよ」

デフは、何もいませんでした。そこで、末っ子は、水をくんで帰り、また町じゅうの人に  
少しずつ分けてあげました。みんなは、すぐに、水を使い切ってしまいました。末っ子はま  
たくみに行きました。デフがさげびました。

「そこにいるのは、だれだ！」

「ぼくだよ。あんたのお客だよ」

「一度目の客、二度目の客。だが、三度目のは、いったいどういう客なんだ」

デフは、そういうと、末っ子がけて飛びかかってきました。

ふたりは戦い始めました。そのうち、末っ子が、デフを膝まで地面にたたきこみました。

ところが、デフは、はい出して、こんどは末っ子を膝まで地面にたたきこみました。末っ子は、はい出して、デフを腰まで地面にたたきこみました。デフは、はい出して、末っ子を腰まで地面にたたきこみました。末っ子は、土の中から飛び出して、デフを首まで地面にたたきこんだかと思うと、刀をぬいてデフの首をぶった切り、その首を刀で地面に突き刺しました。

末っ子は、もどってきておばあさんにいいました。

「さあ、行って水をくんできてよ」

デフが殺されたことが、町じゅうに知れわたりました。人びとも動物たちも、川や池や井戸へ押しかけて水をくみ、水を飲みました。飲みすぎて、お腹がはじけるほどでした。

王さまは、だれがデフを殺したのか知りたいと思いました。そこで、国じゅうの人をお城に集めました。けれども、デフを倒した者は見つかりませんでした。

「わたしがデフを殺しました」という者がいれば、デフの首のところに連れて行って、刀をぬくよう命じました。けれども、だれも、刀をぬくことはできませんでした。

「わしの王国に暮らしている者は、これでぜんぶなのか」と、王さまがたずねると、家来は、

「いえ。ひとりの女とその息子だけが来ていません」と答えました。王さまは、すぐにその二人を連れてくるように命じました。

末っ子は、やってくるのと、地面から刀をぬきとって、

「ぼくがデフを殺しました」といいました。

王さまは、末っ子をお城に招いて、お祝いの宴会を開きました。王さまはいいました。

「おまえの手柄に、わしはどうやって報いたらよかろう。おまえは何を望むかね。この王国をすっかりおまえにやってもいいぞ」

「いいえ。わたしは、ここの者ではありません。上の世界に帰らなければなりません。もし、あなたの力でできるなら、わたしを上の世界に連れて行ってください。それが何よりの贈り物です」

王さまは、

「わしにはそんな力はない。人間を上の世界に連れて行けるのは、パシクンジという鳥だけだ。パシクンジのところへ行ってみなさい」といいました。

末っ子は、すぐにパシクンジのところへ旅立ちました。

行ってみると、巢の中に、パシクンジのひな鳥が二羽すわっていて、一羽は笑っており、もう一羽は泣いていました。

「どうして、一方が笑っているのに、もう一方は泣いているんだい」と、末っ子が聞くと、泣いている方のひな鳥が答えました。

「ぼくは、今日、竜りゅうに食べられるので泣いているんだよ」

すると、笑っている方のひな鳥がいいました。

「ぼくは、あした、竜に食べられるんだ。あと一日生きていられるから、笑ってるんだよ」

まもなく、あたりが真つ暗になりました。ひな鳥たちがいいました。

「ほら、竜が来た。竜が太陽をおおってしまったんだ」

末っ子は、弓を取って矢を引きしぼり、竜の心臓めがけてひようと放ちました。矢は命中して、竜はどうと倒れました。ひどく臭くさいにおいがあたり一面に広がりました。

そのとき、とつぜん、雷かみなりが鳴って、はげしい雨が降ってきました。ひな鳥たちがいいました。

「お母さんだ。ぼくたちが竜に食べられたと思って泣いてるんだ」

ひな鳥たちは、急いで末っ子を隠かくしました。そこへ、パシクンジが帰って来ました。パシクンジは、子どもたちが二羽とも生きているのを見て、大喜びしてきました。

「いったい、だれが、おまえたちを救ってくれたんだね」

「人間だよ。お母さんがその人を食べないなら、会わせてあげるよ」と、ひな鳥たちがいうと、パシクンジは、

「おまえたちを助けてくれた人を、どうして食べるわけがあるんだね。会わせておくれ」といいました。

そこで、ひな鳥たちは、末っ子を連れ出しました。パシクンジは、末っ子を抱きしめました。すると、喜びのあまり、末っ子のあばら骨をぜんぶ折ってしまいました。パシクンジは、あわてて羽で末っ子のあばら骨をなめました。あばら骨は、たちまち、もどおりに

治なおつてしまいました。パシクンジはいいました。

「わたしは、あなたに恩おんを返さなければなりません。何か望みをひとついつてください。どんな望みでもかなえましょう」

「ぼくを、上の世界に連れて行ってくれ。それが、何よりの恩返しだよ」

「分かりました。では、できるだけたくさん肉を手に入れて、わたしの翼つばさの片方にくくり付けてください。そして、もう一方の翼には、あなたがおすわりなさい。とちゅうで肉をひと切れずつ、わたしの口に入れてください。そうやって、上の世界へ飛んでいきましょう」

末っ子は、肉を集めてくると、パシクンジの翼にくくり付けました。そして、もう一方の翼に乗ると、パシクンジは飛び立ちました。とちゅうで、パシクンジが頭を末っ子のほうに向けると、末っ子は、そのくちばしくちばしの間に肉をひと切れ入れてやりました。すると、パシクンジは、また飛び続けました。

やがて、肉の最後のひと切れがなくなつてしまいました。末っ子は、自分のひざの下の肉を切りとって、パシクンジにやりました。

「おお、なんとおいしい肉なこと。これは何の肉？」と、パシクンジは、さげびました。

「これはぼくの肉だよ」と、末っ子がいうと、パシクンジはいいました。

「人間の肉がこんなにおいしいということを知っていれば、とつくにあなたを食べてしまふところだった」

パシクンジが、羽で末っ子のひざの下をなでると、きずは、たちまち治りました。

末っ子を地上にとどけると、パシクンジは、地下の国に帰っていきました。末っ子は故郷ふるさとに向かいました。

歩いたのは、たくさんだったのか、少しだったのか。とうとう、末っ子は、王国に帰り着きました。とちゅうで、ひとりのぶた飼かいに会いました。ぶた飼いは、地面にすわりこんで泣いていました。末っ子が、

「どうしてそんなに泣いているんだい」とたずねると、ぶた飼いはいいました。

「これが泣かずにいられるもんか。上のふたりの王子さまが、末の王子さまをころしてしまつたんだ。そして、ひどいじゃないか、一番上の王子さまが、末の王子さまの花嫁はなよめと結婚なさるんだ」

末っ子は、ぶた飼いに、

「ぼくがその末の王子だよ。ぼくの着物と、君の着物を取りかえてくれないか」といいました。

末っ子は、ぶた飼いに化けて、お城に入って行きました。すると、お城の庭の前で、一番上の王子が、美しい娘とすわっていました。それは、末っ子がデフの穴から助けた末の娘でした。庭では、兵士たちが全員集まって、だれが末っ子が残していった弓を引きしぼることができるか、競争していました。けれども、だれも引きしぼるだけの力がありません。そこへ、末っ子が入ってきたので、一番上の王子はいいました。

「ほら、あのぶた飼いにやらせてみる。やつならできるかもしれないぞ」

末っ子は、弓を受け取ると、矢をつがえ、引きしぼってさけびました。

「雄牛を射ろうか、雌牛を射ろうか」

娘はすぐに、末っ子だと気がつき、心は喜びにあふれました。そして、さけびました。

「雄牛をねらってくださいいな。雌牛にはどうして罪があるかしら」

末っ子は上の王子に向かって矢を放ちました。矢は命中しました。

末っ子は、娘と結婚し、その国のあとを継ぎました。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話20コーカサス』小澤俊夫編訳／ぎょうせい